

中国地域産学官コラボレーションシンポジウム 地域イノベーション創出 2014 in とっとり



平成 26 年 7 月 2 日（水）とりぎん文化会館（鳥取市）において、山下当連合会会長をはじめ 220 名出席のもと、産学官連携シンポジウム『「地域イノベーション創出 2014 in とっとり」』を開催した。

当日は、産業技術総合研究所 理事長 中鉢 良治氏をお招きしご講演いただいた。続いて、公的機関から産学官連携の取組事例を紹介いただいた後に、中国地域の企業（本社が鳥取市、広島市）を交え、「地域における産学官連携とイノベーション」について、トークセッションを行った。

【主催】中国地域産学官コラボレーション会議：中国地域の産学官連携を推進する主要 86 機関による組織体
（当連合会ほか 3 機関が事務局）

■開会挨拶

鳥取県の林副知事に続き、主催者を代表して鳥取大学の豊島学長と当連合会の山下会長から挨拶があり、シンポジウムがスタートした。

山下会長からは、「今後、わが国経済を真に力強い成長軌道に乗せるためには、イノベーション創出に積極果敢に取り組むことが最重要である。本日のシンポジウムを通じて、産学官の間で情報や意識の共有化が図られ、新たな価値の創造に向けてお互いの連携がさらに深まることを期待している。」と挨拶があった。



■基調講演

『知る・創る・役に立つ』

独立行政法人

産業技術総合研究所

理事長 中鉢 良治 氏



イノベーションに役立たないものは科学ではない。科学（知る）・技術（創る）・イノベーション（役に立つ）は一体的に進めるべきであり、こうした観点から、シンポジウムのテーマである「産学官連携のあり方」や「地域イノベーション創出」についてお話ししたい。

まず、中央政府や大学、本社の知識は普遍的・形式的な知をベースにしており、論理的、科学的

ではあるが、現場の条件・知が欠如している。本物の価値、すなわち競争力は現場にこそ生まれ蓄積されて残るものである。例えば「たたら」のノウハウが大和朝廷に残ったという話は聞いたことがない。イノベーション創出には現場が決済する力をもつべきであり、企業は地方に本社を構え、自らの信念に基づき自立的に経営を行うことが必要である。

一方で、丸ごと地方からイノベーションといっても容易ではない。基盤技術の調達については、必ずしも地元や自前にこだわることはなく、産業技術総合研究所などの公的研究機関がもつ中央知を活用して欲しい。そのうえで中国地域のスパイスを注入しながら、人材とともに育てていくことが重要。スパイスとは、いつの時代も地域に存在する「自然の恵み」「1次産業」「手仕事」「暮らしをつくる」「共同性」がキーワードと考える。「たたら」の技術も「21世紀梨」も元は外部から移入した種を地域が取り入れ、ローカルスパイスを加えながら育み発展させたものである。

何をやればよいのか、今後、成長が見込まれるのはどんな分野なのかの答えは、「持続可能で社会に役立つ技術」と考える。例えば伝統産業は幾世代の時代を経て、残り得る共通の価値を提供し、社会的貢献をしてきた企業により形成されたものである。そのような産業こそ将来も有望であり、産業技術総合研究所として全面的に支援していきたい。

■産学官連携・イノベーション創出の取組紹介①

(先進的な取り組み事例)

『コーディネータは“ミツバチ”
～365日24時間の伴走支援で
見えたもの』

公益財団法人 京都高度技術研究所

新事業創出支援部 中川 普巳重 氏

(中川氏は平成25年度イノベーションコーディネータ表彰の
イノベーションコーディネータ大賞・文部科学大臣賞を受賞)



コーディネータとしてこれまで長年、「真実は現場にしかない」をモットーに、社内ベンチャーなどの支援活動をしてきた。その中で気づいたこと、およびそれを踏まえて自分自身が常々心掛けていること等について紹介する。

コーディネートするということは「ミツバチ」として、人と人、機能と機能の間を飛び回ることである。その際に大事なのは、①先入観を持たず、中途半端な知識を持たず、素の状態で聞くこと

(感じる)②聞き取る力をもつこと③見聞きした情報は自分の経験や価値基準で判断せず、その道のプロに相談すること、である。コーディネートするには勘も度胸も必要だが、経験が邪魔をする場合がある。賢い人はできない理由を先に思いつくのでイノベーション、革新を起こせないことが往々にしてある。とにかく素の状態で聞き取ることがまず重要と考えている。

産学官連携の場では、各々のフィールドが異なり、言葉の定義や経験値が違うなかで、とにかく同じ方向に向かっていかねばならない。そのためには現実を客観的に把握し共有すべきであり、まず現状を「見える化」することが重要。特に企業には「どこで誰に何を提供するのでこんな技術が欲しい」といったビジョンを明確にしてもらうことが必須である。

また、各々の間で「スピード感が違う」、「敷居が高い」などの感覚が障害となり、必ずしも物事が円滑に進まないことも多いが、結局は人と人とのコミュニケーションがうまくいくか否かの問題に帰着する。自分自身はコーディネータとして、フィードバックを大切にしながら素直な気持ちで人を感じ、波長を合わせながらプレーヤーに並走し、目的にたどり着けるようコミュニケーション

するように心掛けている。

■産学官連携・イノベーション創出の取組紹介②

(中国地域の取り組み事例)

『カニ殻由来の新素材「キチンナノファイバー」を用いた実用化への取り組み』

国立大学法人 鳥取大学大学院

工学研究科 准教授 伊福 伸介 氏

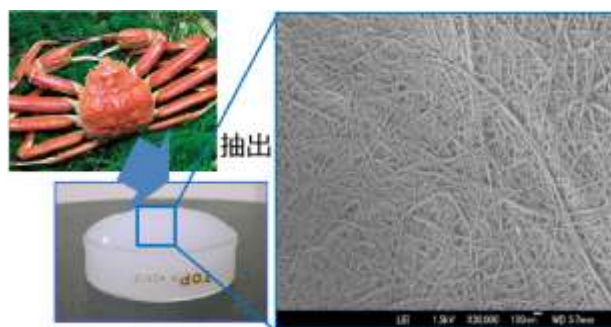


鳥取県は国内有数のカニ水揚げ量を誇るなどキチン(カニ殻の主要成分)関連品の研究開発・生産拠点として環境が整っている。地の利を活かして廃カニ殻を地域資源として有効活用できるよう、鳥取大学・企業・行政が協力し合って研究を進めている。

カニ殻に含まれるキチンを粉砕して遺贈したキチンナノファイバーは幅10ナノ(髪の毛の1万分の1)の極細繊維であり、優れた物性を備え、高強度、高弾性、低熱膨張性である。また、動物に対する創傷治癒や火傷に対する皮膚の再生、植物の病原菌に対する胞子の発芽抑制や病害に対する抵抗性の向上などが明らかになり、今後の利用開発が期待される。

文部科学省や鳥取県の支援を受けて、平成28年度以降のベンチャー企業創出を目指している。

・カニ殻より抽出したキチンナノファイバー



■トークセッション

【タイトル】

『地域における産学官連携とイノベーション』



中川氏 山田氏 中村氏 今西氏 松原氏
(パネリスト) (モデレータ)

○公益財団法人 京都高度技術研究所

新事業創出支援部 中川 普巳重 氏

- ・小規模企業では社長のペースに合わせたサポートが必要。無理なペースの支援により当該企業の本業が行き詰まることもある。
- ・コーディネートに関するネットワークは単なる組織のネットワークではなく、人ありきの繋がりが必要。

○地方独立行政法人 鳥取県産業技術センター

企画総務部 企画室長 山田 強 氏

- ・地域の産業支援機関は、地元企業の方と一緒に汗をかける職員であることが大切。
- ・特許出願件数は伸びてきているが、使われている技術は多くなく、発明、創造、知財の保護・活用をうまく回していくことが今後の課題。

○株式会社 レクサー・リサーチ [本社：鳥取市]

(バーチャル技術での工程設計システム開発・販売会社)

代表取締役 中村 昌弘 氏

- ・ネットワークが繋がればすぐにビジネスになるものではない。まず重要なのは人材育成。
- ・人材育成は事業を起すなかで取り組んで初めて有効。現在、海外への事業展開も挑戦中。

○株式会社 今西製作所 [本社：広島市]

(鑄造用金型の設計製作会社)

代表取締役社長 今西 寛文 氏

- ・産学金官連携は、シーズとニーズどちらから発掘するかの問題があるが、比較的すぐに効果が出るのは企業側のニーズからでたもの。
- ・大学と企業ではスピード感に違いがあるが、お互い本気でやろうとしたものは、少々時間をかけても良い成果が出やすい。

○モデレータ：国立大学法人 鳥取大学

産学・地域連携推進機構長 松原 雄平 氏

- ・本日のシンポジウムのような機会を利用して、地域に根差した力強い産学金官のネットワー

クを作っていく必要がある。

- ・鳥取県では最近、大手企業が行き詰まり、中小企業が大きな問題を抱えてしまったが、産学金官が連携していけば、近い将来、自立した鳥取の企業が生まれるのではないかと期待している。

■閉会挨拶

最後に、経済産業省中国経済産業局長の若井英二氏より、「本日の講演等を通じて、①価値は現場にあること②現場ニーズを拾い上げて技術を活用しイノベーションに繋げることが課題③その際、コーディネータのフットワーク力、ネットワーク力等が重要であること、などを私自身も再認識し、また、参加者全員が共有化できたと思う。本シンポジウムは大変有意義であった。」との挨拶があった。



来年のシンポジウムは広島で開催する予定。

■ポスターセッション

当日は、シンポジウム会場入口のホールにおいて、コラボレーション会議メンバーの活動を紹介するポスターセッション(展示数40点)も行った。



■交流会

シンポジウム終了後、交流会を開催した。交流会は、中国経済連合会 中谷副会長(鳥取銀行会長)のご挨拶で始まり、90名を超える参加者が会場の至る所で積極的な意見交換を行った。



(担当：有馬)